

全校の皆さん、おはようございます。

十二月に入りました。カレンダーも最後のページになり、いよいよ一年の締めくくりだということを感じます。年の瀬になると、来年のことに強く意識が向いていきます。来年はこんなことがしたい、今年よりも良い年にしたい、このようなことを考えながら私たちは年末を過ごしているように思います。

一方で、「来年のことを言うと鬼が笑う」ということわざがあります。聞いたことがあるでしょうか。辞書を引くと「明日何が起こるかわからないのに、来年のことなどわかるはずはない。将来のことは予測しがたいから、あれこれ言ってもはじまらないということ。」このように意味が出てきます。

このことわざを聞くと連想するのが、親鸞聖人が出家の際に詠んだとされる歌です。出家を申し入れた時刻が遅かったということで「今日はもう遅いから明日改めて出家の式をしましょう」と言われた親鸞聖人は、「明日ありと 思うころのあだ桜 夜半に嵐の ふかぬものかは」と詠んで、今すぐ出家の式を行ってほしいと頼んだと伝えられています。

明日も、来年も、本当は今ここには存在しないものです。けれども私たちは、明日も来年もある、という前提に立って生活をしています。しかし、「一寸先は闇」という言葉があるよう、一秒先もどうなっているのか本当はわからない、これが事実ではないでしょうか。

先日の報恩講の法話で、先生は「目に見えないものを考えるのが宗教」だとおっしゃっていました。そのお話しからもう少し考えていくと、現代の知性を持った私たちは、目に見えないものよりも目に見えるもののほうを大事にしていって、さらにそのために、目に見えないものを無理矢理にでも目に見えるものにしようとしている、というところがあることが分かってきます。

人間や物事の価値というものは、目には見えないものです。しかし、価値を比較したい、格付けしたいという心を持っている人間にとつて、目に見えない状態というのは都合が悪いのです。ですから、たとえばテストの点数や偏差値という目に見えるモノサシを作つて本来は目に見えない学力をはかろうとします。音楽を聞いて感動することにしても、その価値は本当は目に見えないものですが、たとえばこれもCDが何枚売れたのか、何回再生されたのか、ランキングで何位なのか、という目に見えるものにして、その価値をはかろうとします。

宗教を学んでいくと、何でもかんでも目に見えるものにしたがる現代の人間の心のクセのようなものが分かってきます。そして、そのことで私たちはかえって見えなくなったり見失ったりしているものがあるのです。目に見えるものしか信じない、数字や結果が全てだ、というと知性的でクレバーな印象ですが、仏教的に見ればその逆で、見えるものに縛られている愚かで危なっかしい人間の姿なのです。